

# 道藏本功過格と浄明道

——酒井・吉岡両博士の争点によせて——

秋　月　観　嘆

まえがき

宋代以降における中国の宗教史は、恰も抬頭しつつあった庶民層の中に、新しい足場を据える道教々団の目覚ましい活動を主導的な契機として展開すると見ることが出来るが、その中軸をなす近世道教の歴史を考察する場合、少くとも、次に掲げる三つの新しい動勢の存在に注目する必要がある。

(1) 中国の江南に勢力をもつ天師道・茅山道などの旧道教に対し、南宋初、つまり十二世紀の初期から太一教・真大道教・全真教・浄明道などの、いわゆる新道教諸派が成立する教団道教の流れ。

(2) 華北、江南の何れを問わず、一般庶民層を中心に善書、即ち種々の功過格や宝巻、及び自知録・陰隲録などの信奉が盛んとなる民間道教の流れ。

(3) 微妙な関連を保ちながら進展する(1)・(2)の道教の流れが、更に仏教・儒教との間に、いわゆる三教融合の傾向を強めてゆく全体的な宗教・思想史の流れ。

この様な新たな潮流を含んで展開する近世道教の歴史の中にあつて、六朝以来の許遜教団の伝統を踏まえて成立す

る淨明道と、功過格の嚆矢をなす道藏本『太微仙君功過格』<sup>①</sup>の両者の關係を明らかにすることは、近世道教諸派の教學的系譜を見定めるうえに、欠かすことの出来ない基本的な問題点である。

いわゆる功過格とは、人間の禍福は善惡の行為の大小・輕重に応じて、天帝によって与えられるとする道教の信仰に根ざし、具体的な善惡の行為に対して規定した点数に基いて、功（善）過（惡）の数を加減計量し、日常生活における道德的行動の示標とした、いわば反省日誌録とも云うべきものであり、この功過格の信仰が南宋以降の中国社会に様々な形をもって浸透し、近世中国人の道德思想や倫理的・宗教的実践のうえに大きな影響を与えてきたことは、今日、周知のことと云ってよいであろう。一方、これに対して、淨明道教団は既に明らかにしたように、母胎である宋代の許遜教団以来、忠孝の道德を中心とした倫理の実踐を強調する布教活動を盛んに展開してきており、共通せる顯著な倫理的性をもつ両者の間に、何等かの教學的な繋絡の存在することを憶測せしめるものがあるのであるが、果して、この両者の關係については、既に酒井忠夫・吉岡義豊両博士の間に異った二つの見解が提起されているのを見るのである。筆者は、かつて両説に対する卑見を簡単に表明したことがあり、<sup>②</sup>そのごの淨明道研究の進捗とともに、この問題の重要性についての関心を深めつつあったが、たまたま、最近その論議が再燃する兆が認められるに至って、かつて註記に止めた卑見の立場を、この際、闡明ならしめておくべき責任を感じ、にわかに小論の筆を起すに至ったものである。未だ充分熟し切らぬ所論のあることを免かれないが、両博士をはじめ、大方の御示教を切に願うしておく。

なお、この小論において触れる両博士の当該論考は、学界において淨明道に關説した最初の論文であって、筆者の現在携わる淨明道研究の志向も、その触発を蒙るところが少くない。ここに一言記して、両博士の学恩に謝意を表しておきたい。

さて道藏本功過格、即ち『太微仙君功過格』と浄明道教団との関係について、まず見解を発表されたのは酒井忠夫博士の『中国善書の研究』である。<sup>④</sup>ここに於ける博士の見解は断定的な結論には達してはいないが、功過格の内容が後世のそれに見られる一般的な民衆道德の外に、主として宗教々団の戒律に連なる功過が重視されていることから

(一) この功過格は特殊な道教々団で作られたと考えられること。

また序文に見えるように、又玄子が金の年号である「大定」をもって年代を記していることから

(二) ここで西山とあるのは金の領域からして、河北か山東あたりの西山であるかも知れぬが、江西省南昌付近の西山を中心とした金代の許真君仙道教団に属する又玄子の号をもった道士が、華北の金の領域下で作成したものであるかも知れないこと。

併し、一方、道藏本の功過条目の内容から推すならば

(三) 許真君仙道教団には有名な浄明忠孝道があるが、この功過格には孝はあっても忠孝は説いていない。

(四) だから浄明忠孝道とは関係がなく、江西の西山系の教団ではなく、華北の西山のある道教々団で作製されたものかも知れない。

と云われており、推定可能な、しかし相反する二通りの見解を併記されているのは、断定を保留されたものと受けとってよいものと思われる。

これに対して、吉岡義豊博士は「初期の功過格」において、該功道格を「西山浄明教系のもの」とみるのが、やはり妥当であるまいか」とする立場から、これに次のような批判的見解を提示されている。<sup>⑤</sup>まず酒井説の(三)に関連して

(一) 該功過格には、はっきりと、忠という文字は出てこないが、且夕朝礼為国、為衆焚修一朝為二功、とか、章醜為国、為民為祖先為孤魂為尊親、祈禳災害薦拔沉魂一分為二功、とか、為国、為民或尊親先亡無主孤魂、誦大經一卷為六功、などといっている「為国」の思想が忠に通ずるものと解釈すれば、何とか処理できよう。

と云い、更にこれと別な観点から

(二) ① 浄明教の起源については(中略)古いところはしばらく措いても、唐末にはたしかに浄明教と称する道教の一派が存在したこと。

② 浄明教の宗教的活動は北宋末以後ようやく顕著になった、と考えなくてはならない。南宋、金、元、明、清を通じてその余流は今日なお活動していること。

③ 浄明教が、中国人の倫理思想の中核をなす忠孝の実践に最高価値を認めて起っており、従って若しも功過格のごとき民衆道德の標準教科書が作成せられるとすれば、編輯者として浄明教徒は適任であろう。事実浄明教徒は(中略)功過格類似的の簿書を所持していたようである。

などの理由をあげて、南宋初の新興宗教が、忠孝を中心とする民衆教化を大眼目として成立したことにおいて、一番古い伝統をもっている浄明教の精神をバックボーンとし、相互に交流があったことも考えられるので「西山会真堂玄子なる人物が、宋金勢力交錯地帯において功過格を感得しても一向に不思議ではない。(中略)道藏本功過格の出現もこの線から解釈すれば理解出来るのではあるまいか」として、該功過格を南昌の西山の浄明教の伝統から出たものと推測されているのである。

この様な吉岡博士の所論に対して酒井博士は正式な応答を示されていないが、最近の吉岡博士の当該論文を収録する著書「道教と仏教 第二」に対する書評において、<sup>⑥</sup>この点に触れ「(吉岡氏は)南宋初の新道教が浄明教の伝統から

起つたとし、道蔵本功過格の出現も浄明教の影響によると考証している。私は両者の関係を明確に出来ないから先にその点を疑問としておいたが、依然として著者の如く浄明道との関係だけからはつきりと断定することは出来ないと考える」と述べており、酒井博士はかつての(三)・(四)の推定を一応見送り、専ら(一)・(二)の考え方の上に立ちながら、なおかつ吉岡説に同意出来ないことを確認されたものと見てよいものと思われる。<sup>⑦</sup>

以上のように両説の内容を整理し、論議の経緯を辿ってくるならば、現在における道蔵本功過格と浄明道の関係についての両者の異見の懸隔は著しく狭まり、浄明教、或は浄明道についての歴史的な認識において、若干の徃廷があることを抜きにすれば、南宋末に出現する新道教ならびに道蔵本功過格と、浄明道との関係を如何に見るか、の点に異見の焦点を絞ることが出来るようである。ところで、この点に関する筆者の見解は、基本的な方向において、これらと異なるものではなく、結論も、また異見の懸隔を更に広げようとするものではないが、従来の所論の中には、浄明道研究の成果に照らして、見逃し難い点があり、また補足すべき点もあるので、しばらく幾つかの資料を加えながら卑見を述べておきたい。

## 二

さて、吉岡博士は前掲の如き酒井博士の(三)・(四)の説に対する批判的な立場から、問題の浄明道の起源に触れ「古いところはしばらく措いても、唐末にはたしかに浄明教と称する道教の一派が存在した」と云われ、その根拠として、「宋の太平興国六年（九八一）に編纂されている太平広記（巻十五）所収の蘭公伝では、蘭公が浄明道を伝授せられたことが説かれている」こと。また「教祖許真君を神功妙濟真君と尊称するのは政和二年（一一一一）に徽宗が与えた封号だと云われているから、いわゆる浄明教の宗教的活動は北宋以後ようやく顕著になったと考えなくてはならな

い」と云われているが、ことに云う浄明教、或は浄明道なるものの歴史的な概念の内容が明瞭を欠くため、聊か誤解を招く恐れもあるようで、まず太平広記の蘭公伝において、蘭公が授けられているのは許遜の伝えた「孝道之宗」であり、「孝道之秘法」であって「浄明道」ではないし、<sup>⑧</sup> いわゆる浄明道とは、後述の如く、元初、嚴密には大徳元年（一二九七）劉玉真を開祖として成立する教団の名称であることが明らかであるとすれば、この場合、浄明教の呼称は必ずしも適切ではないように思われる。恐らく博士は、いわゆる浄明道成立以前の伝統的な教学を含めて、浄明教と云われているようにも推測されるが、南宋初及び元初の再度に亘る教法の変革をへて成立する浄明道と、東晉以来の伝統的な許遜教団、酒井博士の云われる「許真君仙道教団」とを明瞭に区別することが必要であろう。敢えて、この点に注意を払うのは、それが以下の論点に微妙な関連があるからに外ならない。

ところで、浄明道と功過格が深い関係にあったことを示す資料として、吉岡博士は、元頃のものとして推定される『靈宝浄明院行遣式』が浄明弟子の備うべきものとして「浄明記功過簿」をあげており、また『太上靈宝浄明飛仙度人經法』は「説戒具科目章第八」に収録する十戒の第三条に「三者無忘日録」と定めており、何れも功過格に比すべき善悪の日録を必須のものとしている点をあげ、「浄明教の中においては、当然の必要性から必ず功過格式のものが作られていたと考えても行きすぎではない」と云われている。この点は浄明道の入門經典とも称すべき『太上靈宝浄明入道品』にも、反省日録の小冊子を備うべきことを記して

心中常務正直孝友。不得邪淫諂曲輕道慢法。如欲降未來之愆。即当置一小冊。所為日録。其有欺心。自不可形於紙者是也。凡有似此。即速改之則法術自靈。如或違之則災咎立至。但能依此則遙歎正授。超舉凡塵。天書秘法。忽然而至。問弟子能行否。

と訓えており、<sup>⑨</sup> 浄明道において倫理を重視し、功過日録を必修のものとしていたことは明白と云ってよいが、この様

な教法が説かれた時期には若干問題があるようである。

この点について吉岡博士は『浄明忠孝全書』所収『西山隱士玉真劉先生伝』によって、『飛仙度人經』の成立を紹興元年（一一三二）と見なし「この教法を実修する為の指南書が浄明飛仙度人經法であるとすれば、これは飛仙度人經の成立をさして離れない時代の著作といえよう。本書が同じく許真君、即ち高明大使神功妙濟真君許旌陽積となっている所以でもあろう。このように考えるならば、その成立はおそくとも『太微仙君功過格』の出現（一二七一）と相前後する時代のものとみてよい」と述べられている。確かに博士が云われるように『太上靈寶浄明飛仙度人經法』の冒頭には、明らかに高明大使神功妙濟真君許旌陽積と記載しており、これによる限り、本書は許真君に神功妙濟の封号の贈られる宋の政和二年（一一二二）から、至道玄応の追号の行われる元の成宗の元貞年間（一二九五—一二三〇）までの撰述と考えられ易いけれども、同書「識神章第三」（卷一）、及び「符命章第七」（卷二）には許真君を「九州都仙太史高明大使至道玄応神功妙濟真君」と呼んでおり、本書の出現の時期は少くとも至道玄応の封号の贈られる元貞年間以降であることを示唆しているのである。

さて、こゝで『太上靈寶浄明飛仙度人經法』出現の時期を見定めるに当って、浄明道教団成立の精確な年代を明らかにしておくことが必要であるが、既に閑説してきた如く、浄明道は元の成宗の大徳元年（一二九七）に興ったと考えなければならぬ。従来、断片的に挙げてきた諸資料を、ここで纏めて再吟味しておこう。浄明道形成の経緯を物語る根本資料である『西山隱士玉真劉先生伝』には、<sup>⑩</sup>元の至元十八年（一二八二）五月、劉玉真是西山の渦油岡において洞真天師胡惠超に遇い、既に示されている許真君の予諡、すなわち『浄明道師旌陽許真君伝』記載の

吾仙去後一千二百四十年間。五陵之内当出弟子八百人。其師出於予章。大揚吾教。郡江心忽生州。掩過沙井口者。是其時也。

の如き予識の主旨そのまゝに

龍沙已生。浄明大教將興。当出八百弟子。汝為之師。歲在丙申臘月庚申。真君下降子家。子際遇如何真公時。

と告げられている。先生はそこで心竊かに喜び、これより益々精進を加え、孝行里に騰勝道院を立て、善道をもって多くの遠近の人々を教化したと云うが、ここに「浄明大教將に興るべし」と伝えられる一節は、玉真劉の開祖となるべきことの予告であり、この時点において、まだ浄明道の成立していないことを示す鉄証であろう。ともあれ、果して胡君の予言の如く、丙申即ち元貞二年（二二九六）十二月、劉玉真の家に許真君が降り『玉真靈宝壇記』を授けているが、その紙尾には「弟子劉玉真」と記されていたと云う。更に翌大徳元年（二一九七）正月、再び許真君の命を受けた神人より『中黄大道・八極真詮』を授けられ、同時に托された許真君の「吾八百弟子汝為首英。氏名悉在華林八百洞天久矣」と云う伝命によって、浄明道の統率者たる地位を確定したと記している。併し、実際に教団としての活動が開始されるのは大徳元年（二二九七）の十月以後のことのようである。

十月甲午（五日）。寓玉隆清逸堂。丙申（七日）胡（真）君復來授以道法説及三五飛步正一斬邪之旨。由是開闡大教。誘誨後学。其法以忠孝為本。敬天崇道。濟生度死。為事簡而不繁。

と記される通り、劉玉真が玉隆万寿宮の道院である清逸堂において、胡真君より最終的な伝授を受け、大教を開闡した大徳元年十月七日をもって、浄明道教団の成立の日と見なすことに恐らく異論はないものと思われる。

この様に浄明道の成立が十三世紀の末であるとすれば、浄明の名称を冠する『太上靈宝浄明飛仙度人經法』が十二世紀半頃に出現すること自体奇妙なことに云いうるが、更に慎重を期し、かつて成立年代順に分類した許真君記伝類の三つのグループについて精査した結果も、浄明の語は一一二二年前の成立になる第一グループは勿論、それ以後一二九五年に至る間に成立している第二グループの最後に位置する『西山許真君八十五化録』に至るまで全く現れず、



『浄明道師旌陽真君伝』を最初とする第三グループに至って、始めて俄に頻出していることが確認される。<sup>⑩</sup>この結果を裏付けるかのように、『西山隱士玉真劉先生伝』（内集）には劉玉真自ら浄明忠孝道の名称の意義について「浄明只是正心誠意。忠孝只是扶植綱常」と訓えているが、『西山許真君八十五化録』の勇悟真人施岑の撰と伝えられる一二四七年の序文に、許真君の教法を讀えて「祖師許真君。正心誠意、真清常靜。有神固氣。抱一守一。豈非聖功歟」と言い、同じく一二二四年に撰した跋文に祖師の布教にはついて「祖師許真君降于金陵。示陳忠孝之教。溥化衆生。咸歸正道」と述べ、のちの浄明忠孝道の基本教説に触れながら、一言たりとも浄明の語に云い及ばないのは、浄明の語が教団の名称として用いられるのは勿論、教説の中核的語彙として定着する時期も、更にこれより遅れることを示唆するものと云うことが出来よう。

この様に浄明の語の出現の時期が、少くとも一三世紀中葉以降であるとすれば、『太上靈宝浄明飛天度人經法』の成立も、当然それ以後でなければならず、浄明道教団成立後における大幅な經典改竄を認めない限りは、この『太上靈宝浄明飛仙度人經法』の記載に依拠して、許遜教団における功過目録の教法成立の時期を、十二世紀中葉まで遡らせることは困難であろうと考える。但し、このことは許遜教団における功過思想出現の時期を、この『太上靈宝浄明飛仙度人經法』の成立まで遅らせようとするのではなく、許遜教団の伝統的な教説の中には、概ね唐代末期ごろから江南の上清派の系統に属する所謂三元經典の功過応報説の影響のもとに、徐々に功過思想が醸成されつゝあったことを辿ることが出来るように思われる。<sup>⑪</sup>この点は、いずれ起稿を予定している太微仙君と功過格の教理的な関係を考察する際に、改めて検討することゝしたい。

叙上、専ら淨明道教団の来歴に視点を据えて、淨明の語の出現について若干の卑見を述べてきたが、こゝで角度を換え、暫く靖康・建炎の変後、元朝の成立に至る激しい中国の歴史的變動の中に揺らぐ許遜教団の動勢に注目しつつ、上掲の争点である「国の為」と「忠」の道德の關係について考察して見よう。北宋末における教団の本拠、西山の玉隆万寿宮について、『修真十書玉隆集』（卷三十四）所収の『統真君伝』<sup>15</sup>に、次の様な記事がある。

建炎中。金人寇江右。欲火宮庭。俄而水自楹桶間出。火不能爇。虜酋大驚。乃書壁云。金国竜虎上將軍来献忠。被授元帥府上畔都統。大軍届茲。遍觀聖像莊嚴華麗。不放焚毀。時天会八年正月初二日記。主觀想知悉写畢。戰兵而去。

聊か神秘に過ぎるこの記事は、かねて、これに続いて記す数件の神異譚と同様、玉隆宮の神威昂揚をねらう作為になることを疑ってきたが、最近入手せる『逍遙山万寿宮志』（卷十二）によれば、<sup>16</sup>

宋紹興元年正月。命張俊為江淮路招討使。時馬進攻江州陷之。復拠筠州。俊與岳飛揚沂中先後至洪州。進以衆来犯。連營西山。俊與岳飛為先鋒。潛出賊右突其陣。所部從之。沂中由上流絶生米渡。出其不意。戰于玉隆宮側。進大敗奔筠州。

つまり、建炎の末から紹興の初めにかけて、江州の西山は賊將馬進の占領下におかれたが、宋の將軍張俊・岳飛・楊存中らは協力して、これを玉隆宮の付近の戦いにおいて破ったと云うのであるが、この記事は信賴してよいようで『宋史』（卷三六九）の張俊伝には、同年の

紹興元年。帝至会稽。時金人残乱之余。孔彥舟拠武陵。張用拠襄漢。李成尤悍彊拠江淮湖湘十余州。連兵数万有席

卷東南。意多造符讖惑中外。圍江州久不解。

と記しており、江州一帯が強力な李成の軍によって占領久しきに亘ったこと。また同じく『宋文』（卷三六五）岳飛伝にも

紹興元年。張俊請飛同討李成。時成將馬進犯洪州連營西山。飛曰賊貪而不慮後。若以騎兵自上流絕生米渡。出其不意破之必矣。（中略）大敗走筠州。

と見え、江州におった李成の將軍馬進が西山に陣を構えていたが、岳飛と張俊らの、生米の渡河地点を塞いで不意に敵をつく巧妙な攻撃を受けて敗退したこと。更に同じ『宋史』（卷三六七）揚存中伝には、この戦いの経緯について紹興元年。從俊討李成。諸將議多欲分道進。存中曰賊勢如此。分兵則力弱。（中略）俊然之。整軍至予章。存中率兵数千首破于玉隆万寿觀。追玉筠州。

の如く、揚存中が張俊に従って李成を討ち、玉隆万寿觀の戦いにおいて勝利をおさめたことを記しており、前掲の宮志の記事が、これら『宋史』列伝の記述に基くものであることを示している。ともあれ、叙上の如く、西山が北宋末から南宋に及ぶ混乱期において、一連の反宋軍事勢力の征服下におかれ、激しい戦禍にさらされたことは事実であって、このことが許遜教団の、その後の動向の上に種々の影響を及ぼすことは容易に想像しうるところであらう。

果せるかな『西山隱士玉真劉先生伝』には、早くも何真公の請禱について、次の様な記事がある。

至建炎戊申（一一二八）僅七百年。兵禍煽結。民物塗炭。何真公致禱真君。勾垂救度。既降神渝川。諭以辛亥（一一三二）八月望。當降玉隆宮。至期迎俟。日中雲霧鬱勃。自天而下。由殿西徑外玉冊殿。降授飛仙度人經。淨明忠孝大法。真公得之建翼真壇。伝度弟子五百余人。消穢厄会。民頼以安。

玉隆万寿宮の道士何真公が、建炎の兵禍に逢って苦しむ民衆の救済を願った禱請に応じて、紹興元年（一一三一）八

月十五日、許真君が玉隆万寿宮に降り『飛仙度人經』と「淨明忠孝大法」を授けた。<sup>19</sup> 何真公はこれを得て翼真壇を建て、弟子五百余人を伝度し、厄難の消除につとめて民衆を安堵せしめたと言うのである。建炎・請康の難に処して、間発をいれぬ行動に出た何真公とは如何なる人物であったのか、上掲資料以外は殆ど不明に近く『逍遙山万寿宮志』（卷十三）人物志に淨明道の開祖である劉玉真伝に続けて、何真公の略伝を載せているものの、僅かに冒頭「未詳其里氏名。為玉隆宮羽士」と記したあとは、上掲玉真劉先生伝の記事を簡略に写し「互見劉玉真伝」と結んでいるに過ぎない有様である。然しながら、この何真公の得道と伝道は、許遜教団にとつては勿論のこと、淨明道の成立にとつても極めて重要な意味を持っていたと考えなければならぬようで、『西山隱士玉真劉先生伝』によれば何真公の伝えた教法が、その二百余年にして、やや衰微し、至元十九年（一二八二）に至つて、劉玉真が胡惠超から許真君再降下の予告を受ける際、許真君を迎える迎謁の儀礼は、かつての何真君の先例に習うべきことを注意されておることは、何真公への伝授の形式が儀礼的規範として承認されていたことを示しており、祖師許真君に連なる両者の親近性を暗示しているが、このことは単なる教法伝授の形式に止まらず、更に所伝の教法自体において、より適確に指摘しうるものがあるのであつて、『西山隱士玉真劉先生伝』の問答中に、劉玉真に対して弟子が「昔何真公所伝稍繁。今先生所授極簡。何其不同」と云い、何真公の教法と劉玉真の所伝との間に甚しい繁簡の差があるのは何故かと、その理由を質しているのに対し、劉玉真は「昔紹興之時。仙期懸隔。權以救世。以法弘教。故繁。今竜沙已生。仙期迫近。急於度人。以道宏教。故約。此所以異。然其至則一。無庸疑」と答えており、何真公に対する降授の際は、許真君の予讖に「大教興るべし」と云われている一二四〇年後の仙期まで、まだ余裕があつたので、權りに世を救い、法をもつて教を弘めたので繁瑣であつたが、今は既に竜沙が生じ、予讖の仙期も迫っているので、急いで人を救度し、道をもつて教を宏めたため、両者は異つて見えるであらうが、教法の至極のところは全く同一である。愚かな疑いを持たない

ようと誠め論じたことが見えているが、この資料が浄明道成立当時に撰述された祖師玉真劉の記伝であることは、とりもおさず、当時、翼真壇を中心とする何真公の教法と教化活動に対する浄明道教団の高い評価と、教理的系譜の中における重要な位置づけを示すもので、許真君の何真公に対する降授が、許遜教団の近世的な脱皮と変革の結果として成立する浄明道出現の前段階として、更には教理的な母胎として、極めて重視しされていたことを物語るものに外ならず、両者の間に、縁親の關係のあることを示唆するものと云ってよいであろうし、また紹興の時に当って、何真公の教団が敢えて予識の仙期の到来を待たず、急いで権法を用いてまで、救世・弘法の活動を開始している事實は、何真公の請禱と、それに対する許真君降授の背影に、金斉の侵入に伴う南宋初期の急迫せる状況が、極めて重要な影響を及ぼしていることを裏書きするものと云ってよいであろう。この間の状況の推移を見定める参考までに、關係事項の年表を掲げよう。<sup>19)</sup>

# 關係事項年表

一〇一〇年（宋大中祥符三年）	宋真宗、惟遊觀に「玉隆」の觀額を賜与す。	度のため、許真君に請禱す。	
一一二二年（宋政和二年）	宋徽宗、許真君に対し「神功妙濟」の尊号を奉る。	一一二九年（同右 三年）	十二月、金軍長江を渡り南侵。高宗、定海より海路南に逃る。
一一一五年（同右 五年）	正月、阿骨打即位、金国成立す。	一一三〇年（同右 四年）	一二月、金軍明州に至る。高宗温州に逃る。二月、江淮宣撫使杜充金軍に降る。九月、金劉豫を齊国皇帝に封ず。
一一二五年（宋宣和七年）	十月、金、代宋の軍を起す。十二月、宋徽宗、皇太子（欽宗）に讓位。	一一三一年（宋紹興元年）	八月、許真君何真君の請禱に應じ、玉隆宮において教法を降授す。何真公これを受けて翼真壇を立て、弟子を教化す。
一一二七年（宋靖康二年・建炎元年）	三月、張邦昌楚国皇帝に封ぜらる。五月、金軍徽宗を捕えて北帰す。	一一三二年（同右 二年）	高宗臨安府（杭州）に歸る。
一一二八年（同右 二年）	何真公、兵禍による塗炭の民苦救		

を陳ぶ。勇悟道院立つ。

一二三四年（同右 四年） 九月、金齊聯合軍淮南に侵入す。

一二三六年（同右 六年） 九月、齊軍淮西を侵し、撃退さる。

一二三八〇年（金天眷年間） 蕭抱珍太一教を開く。

一二四二年（宋紹興十二年） 四月、金宋の和議成立。淮水を

国境と定む。

同 右（金皇統二年） 十一月、劉德仁真大道教を開く。

一二五九年（金正隆六年） 六月、王重陽甘河劉において神仙に

遇う。

一二六三年（金大定三年） 王重陽全真教を開く。

一二六四年（同右 四年） 「太上感應篇」撰述さる。

一二七一年（金大定十一年） 二月、西山会真堂又玄子「大微

仙君功過格」を授かる。

一二二四年（宋嘉定十七年） 許真君金陵に降り「忠孝之教」

誨す。

一二五五年（宋宝祐三年） 八月、第一回仏道論諍行わる。

一二五六年（同右 四年） 五月、第二回仏道論諍行わる。

一二五七年（同右 五年） 七月、第三回仏道論諍行わる。

一二八一年（元至元十八年） 十月、金全真教を弾圧、道藏偽

経の焚毀行わる。

一二八二年（同右 十九年） 五月、劉玉真胡惠超に遇い、淨

明大教の師となるべき讖言を受く。

一二九七年（元大徳元年） 正月、劉玉真許真君より中黄大道

・八極真詮を授けらる。十月、玉隆宮清逸堂に

において、胡惠超より道法説・三五飛歩正一斬邪

之旨を授けられ、淨明の大教を開き、後学を誘

この年表を通覧して明らかかなように、建炎・靖康の変を頂点とする宋国の危機的状況の進展に伴って、許真君に対する新たな信仰の動きが派生しており、叙上の何真公の請禱も、金の大軍が高宗を追って寧波に迫る漢民族未曾有の危局に際して行われていることは注目の要がある。当時は、恰も、さきに帝位を譲った徽宗が退位の詔勅において、宋国の命運を危機に陥れた不明を謝罪すると共に、四方に勤王の軍が現れ、天下の軍人・官僚が衆兵を率いて奇功をあげ、草沢の異材は輩出して国家興隆の大業を樹てよ。と云う徽宗の期待に應えるが如く、八字軍・紅巾軍・花帽軍・忠義軍などの勤王軍が、金育の酷しい支配に対して強い反感をもつ華北地方の漢人の間に出現し、これに対する宋朝の慰撫と組織化が積極的に進められていた際である。<sup>21</sup>この様な勤王軍の出現は呂振羽氏も指摘しているように、北宋末以来、高まりつゝあった宋朝内部の根深い党争と階級的対立が、金の侵入によって後退し、対立・抗争する両者

が、共同して民益・国益に当らんとする民族的行動として捉えうるものであり、ここに忠の道德が單なる君臣間の個人的・抽象的な道德觀念としてではなく、民族の当面する現実の苦難を克服する「国の為」の実践的行為として説かれ、且つそれが急速に波及・浸透してゆく歴史的な条件を見出すことが出来よう。『宋史』列伝に、岳飛は自から「盡忠報国」の大文字を背中に彫り、韓世忠は出陣を前にして部下を集め「今日当以死報国。而不被戮矢者皆斬」と叱咤し、張俊もまた戦斗に臨んで「今日惟以一死報国」と涕泣したと伝えられる事実は、彼等の滅私力戦の行動が君主に対する臣下の義務としてよりは、寧ろ「国の為」の忠誠心に支えられていたことを如実に示すものと考えてよいであろうが、斯くの如き状況下において、兵禍による民苦の救度を禱り、やがて許真君の降授をえて、民衆を安堵せしめたと云われる、何真公の「淨明忠孝大法」の忠の所説は、恐らく君臣間の個人的な倫理を超越した「国の為」の献身的な愛国的行動としての忠誠の道を強調するものであったであろうと考えることは、決して無理な憶測ではあるまい。② 問題の道藏本功過格の出現は、前述のように、一一七一年のことであると見てよく、靖康の変ののち、既に約四十年の年月を経過しているとは云え、この間における宋金の国際関係が、常に一進一退を繰り返していることは前掲年表の示す通りであり、紹興十二年（一一四二）の淮水中流をもって国境とする和議の成立で、暫くの安定期があるものの、紹興三十一年には、この二十年に及んだ安定も再び破れ、水軍を加えた海陵王の大々的な南伐が行われており、更に翌々大定二年八月には、新たに海・涇・唐・鄧の四州の歳幣の割譲が行われている有様であり、両国間の緊張関係は依然として継続していると見てよい。③ このように道藏本功過格成立の時代的背景が、靖康・紹興のころにおける宋国の危難において、基本的に変わらない限り、社会生活の具体的な道德規範を規定する功過格において、忠の道德が国家・民族の安寧を護るための具体的・実践的行動として表出され、要求されることは、敢えて怪しむに足るまい。

ところで功過格の「国の為」の所説が、金の侵略による宋国の危機を背景として展開した忠の教説であると見ることが許されるならば、功過格に対する影響は、これに止まる筈はなく、三百余条に及ぶ条目の中に、それに類する時代的な影響が認められることは当然であろうが、既に引用したように、道蔵本功過格の「焚修門」において、問題の「国の為」が説かれる場合、これに「衆の為」或は「民の為」の所説を伴い、また「教典門」においては、専ら、一般民衆を対象とする「救衆」の経法が、教団にとってより本質的な「保養性命」や「演道」の教法よりも重視されておるばかりでなく、教法の伝道にあつても

伝受行法官一人為百功。籙生弟子一人為五十功。受戒弟子一人為三十功。

と定められ、「行法官」に対する伝道を、「籙生・受戒」の弟子に対するそれに倍する功値を付与するなど、直接に民衆の生活に関係をもつ官吏に対する働きかけを重視している点など、恐らく異民族支配の重圧下に呻吟する民衆の生活の実質的救済を目差す、道蔵本功過格の積極的な姿勢を窺わしめるものと見てよいであろう。然しながら、斯様な現実的・社会的な志向は、必ずしも、単純に宋金関係の異常事態の下において、突如として発生したものと考えるべきではなく、祖師許遜が旌陽令以来「民人・社稷・君臣之義を重んじ、超越的な清浄無為の境地を求めるよりも、民衆の塗炭の災患を捍禦する」為の社会的実践の道を教えている許遜教団の、いわゆる済世利民の伝統的な思想に連なるものと想定して誤らないと思われる。

#### 四

叙上、迂遠ながら重ねてきた検討を通じて、道蔵本功過格と許遜教団の教法の間に、一脈の繋りのあることを推測しえたように思われるが、次に、この功過格の撰者と見るべき「西山会真堂無憂軒又玄子」の冠称を手懸りとして、



両者の關係を、更に検討して見よう。

この冠称に用いられる「西山」は、その順序から見て、恐らく撰者に深い關係のある地名と見てよいであろうが、かつて考察を加えたように、中国の文献に現れる西山の地名は甚だ多く、座右の『讀史方輿紀要』・『中国古今地名辭典』に収録されるものに限っても三十箇所を超えており、試みに道教に關係の深いもののみを拾っても、道家の十二洞天・三十二福地と云われる江西省新建県の西、宋の真德秀講学の所となった福建省浦城県の西、晋の許遜が隱遁した浙江省臨安県の西などを挙げることが出来るけれども、この場合、最も注意すべきものは最初の西山であり、兩博士の比定をまつまでもなく、晋代以来の許遜教団の本拠であり、淨明道の本山とも云うべき玉隆万寿宮のある南昌府新建県の西山を、これに当てることはまず異論のないところと思われるので、一応この線に副いながら、次に「会真堂」についての検討を進めよう。かつて筆者は、宋代における玉隆万寿宮の結構を『修真十書玉隆集』所収の『統真君伝』によって紹介し、道教に心酔した徽宗が、政和六年（一一一六）既に隘陋となった玉隆觀を、西京の崇福寺の図本に倣って修建せしめた際の造営規模、即ち

凡為殿六。小殿十二。三廊。七門。五閣。前殿三。（中略）環以墻垣、由墻え西旰真人故居建道院、以安道衆。の記述を基に考えたが、そのご入手しえた『逍遙山万寿宮志』（卷七）は、同様な記述に続いて「額曰玉隆万寿宮、旁起三十六堂、以処道衆」と記し、更にこの三十六堂の具体的な名称を東西に分けて

東。樂益。道德。萬福。清隱。<sup>其一</sup>雲鶴。積善。崇義。講道。集善。慕真。棲隱。妙濟。修真。悟真。玄真。  
會真。雲影。西。靈暎。安福。玄妙。清真。景福。会善。幽隱。由義。崇福。致德。清逸。冲虛。華隱。崇  
德。持敬。處隱。大觀。致福。

と列記しており、問題の「会真堂」の名称が東の末尾に見出される。『同書』（卷一）に載せる玉隆万寿宮全体の殿

宇配置の見取図である「宋勅建玉隆万寿宮之図」によれば、「会真堂」は宮殿の外側左右に並列する十八堂の右（東側）の手前より二番目に位置しており、前掲の堂名は東西ともに宮奥から宮門に至る配列の順序に従っていることが知られる。ともあれ、これによって宋代の西山玉隆万寿宮に「会真堂」なる道院の在ったことが確認出来る。ただ会真の語は他にも例がない訳ではなく、又玄子の名乗る「会真堂」をもって、直ちにこの道院に当てることは危険であり、安易な推定は慎まねばならないが、西山玉隆万寿宮の「会真堂」に對置される西側道院の中期に見出される「清逸堂」とは、既に明らかにしたように、開祖の劉玉真が一二九七年十月に許真君の最終的な降授をえて、淨明道を開創した道院であり、『中黄先生碑銘』（淨明忠孝全書所収）によれば、淨明道の第二祖である黄元吉について

年十二入玉隆万寿宮。事清逸堂朱尊師。朱歿。其師王月航尊師愛之而教之。云云

と記しており、二祖も、この「清逸堂」において朱尊師の許に入門を許され、歿後も引き続いて、その師匠である月航尊師に愛され、その指導のもとに修道を続けたことが知られるのであるが、これらの記事は玉隆万寿宮の道士達が在住道院の名称を用いて、その所属を明らかにしていたことを示唆するものであり、問題の「会真堂」もまた、これと同様、功過格の撰者である又玄子の所属道院を示すものと見做してよいように思われる。時代は若干降るが『逍遙山万寿宮志』（巻七）に、清初の万寿宮の道院と、その学系について、次の如く記している。

全真堂 徐守誠。岑守默。同德鋒。同建此堂。惟黄冠之流。煉養服食者居之。

致福堂 旧伝。真君著拔亡録于此開局。又白真人正道藏科儀亦此局。故今称局下。門内有吁母井。（下略）

万福堂 今称樓下。

大觀堂 今称前房。

持敬堂 今称後房。合上致福等共四堂。皆羽流之士。經典科教者居之。

ここには、会真堂の名は見当たらないが、新たに清朝の道士徐守誠らによって建立された全真堂のほか、宋代の旧三十六堂の名称を継承する他の四堂は、それぞれ独自の教法を伝承していたもので、まず全真堂は黄冠の流派に属して専ら煉丹、養生、服食の道を伝え説く者が集っており、これに対して、持敬堂は致福以下三堂と共に、羽流の士の系統に属し、専ら經典、教理を学び説く者が集っていたと云うのは、道院の各堂が単なる道士の雑居房ではなく、それぞれ伝統的な教説を中心として形成される教派的性格を備え、これに基く独自の宗教活動を行っていたことを物語るものであろう。斯様に見てくるならば、江西省の西山玉隆宮の三十六堂の中に、やがて浄明道開創の中心的な役割りを果たす「清逸堂」と並んで、許遜教団の倫理実践と、済世利民の活動を強調する道院「会真堂」があったと考えてよく問題の道蔵本功過格は、この「会真堂」において修道した許遜教団の道士、即ち西山の会真堂に住む玄子が、道院の伝統的な教法を踏まえて作製したものであろうと推定することが出来る。<sup>③</sup>

### おわりに

吉岡・酒井両博士の争点によせて進めてきた叙上の考察に大過なしとするならば、道蔵本功過格と浄明道との関係は、概ね次の如く纏めることが出体よう。問題の浄明道は元の大徳元年（一二九七）十月、玉隆万寿宮清逸堂の道士劉玉真の開創になるものである。されば浄明道の教説が許遜教団の伝統を継承するものであるとは云え、遡って元代以前の許遜教団に対して、この名称を用いることは歴史的に見て正しくないし、大定十一年（一一七一）成立の道蔵本功過格が浄明道の教学から直接的な影響を被ることはありえないと云わなければならない。然しながら、このことは許遜教団と道蔵本功過格の教理的な関係を否定するものではなく、道蔵本功過格は許遜教団と浄明道との接点に位置し、浄明道の母胎となった何真公の新教法を介して、許遜教団の説く所謂済世利民の伝統的な教法を承け継いでお

り、両者の間に教理的な脈絡のあることを認めなければなるまい。ただ、この様な関係を拡張して、近世における新道教諸派がすべて許遜教団の伝統の中から興起したと見做すことが出来るか否かについては、まだ断定を下すべき充分な資料が整っていない。確かに新道教諸派の成立に、許遜教団が大きな影響を及ぼしていることは充分予測しうるが、その際、許遜教団の果たした役割の実態は、今日、空白のままになっている唐末より北宋に至る間の、許遜教団の具体的な動勢の解明をまっして、初めて、その輪郭を明らかにすることが出来るであろう。いずれ後考に俟ちたい。

## 註

- (1) 道藏 洞真部 戒律類 第七八冊。
- (2) 拙稿 (1) 許真君伝考——淨明道研究序説——集刊東洋学 第十五号。  
(2) 許遜教団と淨明忠孝道 道教研究 第三冊。  
(3) 淨明道教学管見——儒仏道三教關係を中心に——東方宗教 第三十五号。
- (3) 前掲拙稿 (1) の註記参照。
- (4) 中国善書の研究 二九四—二九七頁。三七二—三七三頁。
- (5) 吉岡義豊 初期の功過格について 東洋文化研究所紀要 第二十七冊。
- (6) 東方宗教 第三十五号 書評。
- (7) なお、酒井博士は前掲(一)・(二)のように許真君仙道教団と功過格の關係を推測される一方、これと相反する推論を併せて提示され、(三)のように道藏本功過格は孝を説いているが、忠の道德を説かないから淨明道とは關係あるまい。とも推定された。この見解は博士の主張の中に認められる「許真君仙道教団」と「淨明忠孝道」とを明確に区別する考え方に立つ限り遅れて成立する淨明道の影響を功過格が受けないのは当然であり、正当な推論と云わなければならぬが、続いて博士が、だからこの功過格は江西系ではなく、許真君仙道教団以外の他の教団で作製され行われたのかも知れないと云われるならば、(三)・(四)の所見は一連のものとして共に賛成し難いものとなろう。そこには淨明道と、いわゆる許遜教団との歴史的な關係の曖昧さが潜んでいるように思われるからである。
- (8) 太平広記(卷十五) 蘭公伝において、斗中真人より蘭公が托されているのは「吾於上清已下。託化人間。示陳孝悌之教。後晋代有真仙許遜。伝吾孝道之宗。是為衆仙之長。因付蘭公至道秘旨」のことであり、その伝は最後に「所伝孝道之秘

法。別有宝経一帙。金丹一合。銅符鉄券。得之者唯高明大使許真君焉」と結んでいるが、浄明道については全く触れるところはない。

(9) 道蔵 洞玄部 方法類 第三一五冊。

(10) 同 右 第三一六―七冊。

(11) 本節に引用せる『西山隠士玉真劉先生伝・浄明道師旌陽許真君伝・玉真靈寶壇記』の三点は、何れも道蔵 太平部 第七五七冊『浄明忠孝全書』所収。

(12) 前掲拙稿 (1) の冒頭において、整理を試みた許遜記伝類の成立年代判定の方法を参照された。

(13) 道蔵 洞玄部 譜錄類 第二〇〇冊『西山許真君八十五化録』は勇悟真人施岑の撰となっているが、跋・序・再識のみならず、本人の伝記である「勇悟化」を収録していることから疑うべきであり、実際は鏤梓募金に当った邢道堅の撰であると推測される。その成立年代は序文に見える「巨宋丙午」の記事によって淳祐七年(一二四七)ころと見てよい。

(14) 三元・応報の思想については、拙稿「三元思想の形成について——道教の応報思想——」東方学 第二十二輯。「六朝道教における応報説の發展——教理展開追迹の一試論——」弘前大学人文社会 第三三号を参照されたい。また、功過思想の起源及び發展について説くものには、酒井博士前掲書三五九―六九頁。吉岡博士前掲論文のほか「功過格の一流流」

(15) 東方宗教 第十五号がある。参考されたい。

(16) 道蔵 洞真部 方法類 第一二八冊。

(17) 『逍遙山万寿宮志』の名称は必ずしも正式のものではなかったらしく、清初の重修本の序文において『重修玉隆万寿宮志』、或は『重修許真君逍遙山万寿宮記』などの別名を用いており、『許太史』(歴世真仙休道通鑑所収)伝の最後に「真君昭靈著驗非一。屢承恩寵事述。詳載逍遙山玉隆万寿宮志」と記す宮誌は、これを指すものと見てよいものと思われる。

(18) 『宋史』張俊伝が李成らを「金人殘乱之余」と云い、『統真君伝』や『逍遙山万寿宮志』が、これを「金軍」としていることは問題であり、叙上の賊将は何れも北宋末から南宋にかけての社会的混乱に乗じて烽起した軍閥の類に過ぎず、玉隆万寿宮の戦斗に大敗して北方に退いてのち、金の傀儡国家であった齊国に投降し、齊軍に偏入されて南征に従事しているにしても、紹興元年(一一三一)の時点において、彼等を金軍とすることは歴史的な精確さを欠いていることは否めない。

(19) 本文において浄明道の成立を検討し、浄明の名称の出現の時期を十三世紀末と判断したが、一一三一年の降授の際に「浄明忠孝大法」が授けられたと云うこの記事は明らかにこれと矛盾している。併し『西山隠士玉真劉先生伝』を収める『浄明忠孝全書』は十四世紀初頭の編纂であるが、同様な記述は珍らしくない。例えば巻一の「浄明経師洪崖先生伝」には、隋代に再び出現したと云う古仙人洪崖が、同じく『浄明法師洞真先生伝』には唐中期の道士である胡惠超が、共に「嘗遇

日月二君授以淨明・靈寶忠孝之道」と云われており、教団成立後に行われた祖師伝編修の際に加えられた一連の改換・竄入の結果と見做してよいのであって、清の熊益革の撰する『万寿宮降輿顯末記』に「(許真君・東晋太寧二年)婦旧隱・嘗与弟子講究淨明・真詮」と伝え、恰も淨明の名称が許遜在住の頃まで遡るかの如く記すものと一類のものと考えて差支えあるまい。本表中表中の宋金宋金関係の事項は外山軍次教授の『金朝史研究』巻末の年表を参考した。

(19) 『宋史紀事本末』(巻五六)「金人入寇」によって要点を挙げるならば

永念累聖仁厚之德。涵養天下百年之余。豈無四方忠義之人。来徇國家一日之急。応天下方鎮郡県守令。各率衆勤王。能立奇功者。並優加獎異。草沢異材。能為國家建大業。

(21) 孫克寛 南宋金元間的山東忠義軍与李全 (蒙古漢軍及漢文化研究所収)。

外山軍治 金朝史研究 第二五—四五頁参照。

(22) 呂羽振 簡明中国通史 (巻下) 五六〇—五七五頁参照。前掲酒井博士の「書評」にも、この点の予測が示されている。

なお、陳垣『南宋初河北新道教考』(四九—五五頁)「官府之猜疑 第九」に、新道教の出現は金政權が猜疑し、嫌惡するところであつたにも拘らず、成長しえた重要な因子として、金の統治に対する漢民族の不滿・不服の強かつた点を指摘し、世宗の大定三十年間の民乱約十六件を列挙して、

凡此所鉤。皆平民也。官吏不与。皆漢人也。非漢人不与。金世宗号称小堯舜。因為史官諛詞。然其時金拋中原。已五六年矣。諸人豈有愛於宋乎。愛中国耳。平民何独愛國。以金人待遇不平。時感國非其國耳。

と述べているのは、さきに引いた呂振羽の見解とほぼ規を一にしており、金の支配に対して抵抗する士人、特に漢人の意識が宋の君主に対する忠義ではなく、漢民族の国家中国の回復による和平の追求に根ざすものであつたことを強調している点は、小論における串見の基本的な見解を裏付けるものと云えよう。

(23) 南宋の代表的雄武の忠臣である岳飛の伝は「宋史」卷三六五。韓世忠は「宋史」卷三六四。張俊は「宋史」卷三六九。

(24) 中国近世の新道教諸派のうち、真大道教・淨明道の兩派が忠孝の道徳を説いているが、庶民的性格が濃いと云われる新道教々団において、忠の実践が強調される理由が何処にあるのか、理解に苦んできたが、叙上の如く、これを國の為の実践

行動と解すれば、この疑問は水解しよう。忠の道徳を説かないと云われる全真教においてすら『全真清規責罰榜』(道藏正一部 第九八九冊)の冒頭、第一条において「犯国法遣出」と規定しており、教団が国家の存在を積極的に肯定する態度をうち出していることも、これと無関係ではあるまい。なお、この清規については拙稿「全真清規責罰考」文化第二十

二卷 五号を参照されたい。

(25) 宋史(卷三十三) 孝宗本紀 隆興元年条。外山軍治前掲書参照。

(26) 『大微仙君功過格』（教典門）に、例えば

以救衆經法付人爲五功。保養性命經法付人爲四功。演道經論付人爲三功。（中略）自己簡編救衆經法一宗爲十功。保養經法一宗爲五功。讀道之文一篇爲一功。

(27) 許遜教団の教説のもつ現世的・社会的な志向については、前掲拙稿(2)にも触れたが、ここに明代の儒家的教養人である魏良輔の批評を『逍遙山寿宮志』（巻七）黄堂隆道宮の条によって引用しておく。

是故旌陽之令有民人焉。有社稷焉。有君臣之義焉。志在用世則非絕世者矣。斬蛟縛邪爲民禦災捍患。則非專以清淨無爲爲尚者矣。の如く、許真君は旌陽令の時より民衆、国家、君臣の道義を重んじ、世俗を超越して清淨無爲の境地を追求するのみではなく、民衆の災患の捍禦の爲に行動している点を高く評価しているのは最もよい例証と云えよう。

(28) 拙稿 西山考——浄明道の歴史地理(一)——福井博士頌寿記念東洋文化論集。

(29) 拙稿 旌陽県と玉隆万寿宮——浄明道の歴史地理(二)——弘前大学 文経論叢 第四巻二号。

(30) 巻頭所掲の写真図版を参照されたい。

(31) 会真の名称を用いるものは、道蔵中にも施肩吾撰『西山群仙会真記』洞真部 方法類 一一六冊。王吉昌撰『会真集』同上。などがあるが、前者は酒井博士も指摘されるように、撰者には疑問なしとしないが、この書がほぼ全編にわたって得道の神仙十余人と云う『西山記』を引いており、例えば巻二養寿の項に

善養寿者以法修其内。以理驗其外。内則秘静養炁。安魂清神、形神俱妙。与天地育年。鍊神合道。超凡入聖也。驗外則救貧濟苦、慈物利人。孝千家。忠干国。順於上。悞於下。害不就利。忙不求閑。（中略）然是修養所致、亦是陰德報之。苟不達養寿之宜。安得内外育成乎。

つまり、救貧・濟苦・慈物・利人・孝・忠・順・悞などの実践をもって、養寿の要件となし、禁忌を犯さば正訣を得るも寿が除かれ、罪をもって功に当てることとなり、速かに成就することは出来ない。と述べていることは、この書が南昌西山の許遜教団、或はのちの浄明道の教説と深い関係をもっていることを窺わしめるものであるが、この「会真」の名称が所謂「会真堂」を指すものであるか否かは確証がないし、後者の『会真集』の如きに到っては、直接的な関係を全く求めえない。

(32) 浄明忠孝全書 道蔵 太平部 七五七冊所収。

(33) 「無憂軒」については定考をえていない。金の太定二十年に卒している真大道教の祖師劉德仁が「無憂」を号しており（陳垣『前掲書』）、また彼の教法を簡単に示す「九誠」の第二条に「二日。忠於君。孝於親。」云云（宋学士文集巻五五）

書劉真人事」の如く、忠孝の倫理実践を重視しており、この点、新道教の中では浄明道に最も近い立場にあるが、彼の伝記を通じて、浄明道あるいは許遜教団との、直接的な交渉を迎えることは出来ず、勿論、別人と見なされなければならぬ。

#### 付記

本稿は「元明時代における浄明道の研究」に対して交付された昭和四十五年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

一九七〇年 十二月 十日稿了。